

2800-3800 耗にして本邦でも屈指の多雨地帯に屬する。植物相では相當奥地とは謂へウバメガシ、アラカシ、シラカシ、アヲガシ、ヤブニクケイ、タブノキを始めケイビラン、ウチョウラン、ホトトギス、ナツエビネ、ヨウラクラン、ハカタシダ、コガネシダ、トキワシダ、イワヘゴ、イワユキノシタ、オオコゴメカマツ等の暖地性植物多く殊に暖地海岸地帯を埋めるウバメガシが陸續としてその巨幹を交へる様は一種異様な感を深くする。恐らく之は一に那賀川の豊富な水の影響によるものであつて、本地域は大體その限界點に當る。本植物の生育地是那賀川の本流より急坂約1 軒の東南斜面の中腹、標高約700 m に位し石灰岩の露頭多く、徑 10-25 cm に及ぶ杉の人工林内にある。林内並その附近にはモミ、カヤ、イヌガヤ、エゾエノキ、ハリギリ、ネムノキ、アセビ、ウリカヘデ、シラキ、イヌシデ、クマシデ、アカシデ、アワブキ、ウリノキ、ダンコウバイ、イロハモミヂ、フデキ、カナクギノキ、リョウブ、ミヤマフエイチゴ、シマカンギク等の温帶性要素の外タブノキ、ヤブニクケイ、カゴノキ、シロダモ、ヤブツバキ、ウバメガシ、アラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、ゴンズイ、アヲキ、イヌビワ、テイカカヅラ、ツルマサキ、イタビカヅラ、リュウキュウヤブラン、オニカナワラビ等多數の暖地性植物を混じその上側面には石灰岩の大露頭を負ふ。生育は主として陰濕の杉の落葉中に多く、殊にそのよく腐蝕した堆積植土中に多い。分布面積は凡そ 0.5a に達しその中心地に於て到る所小群落を形成する。想ふに本地域はもともと原始暖帶林下にあつたが、いつしか杉の植林に切替えられ漸くその生命を保持しつつ今日に及び漸次その條件の回復と共に再び大繁殖を見たものと想像せられる。地質、氣象、植物相、光度、溫度等環境條件は殆んど大龍山と變る所はないが民有の植林地内の事として何時又伐採の厄を受けぬとも限らず、悔を將來に残さない様今後その保護育成の途を講ずる必要を痛感する。

Pl. II, fig. 2. 那賀郡澤谷村小島的全景、矢印はその生育地を示す。

Pl. II, fig. 3. 林内に於ける *Glaziocharis Abei* の生育とその群落。(Aug. 4, 1950) 落葉を除いて撮影、周圍には落花後の果實多數を見る。

オトルコギキョウとは何か (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: *Eustoma selenifolium* is cultivated in Tokyo.

昨年頃から、夏から初秋にかけて、東京の切花やのまどにトルコギキョウと稱するキキョウに似た切花が見られる。この花はトルコと反對の方角の中米原産のリンドウ科のもので、學名は *Eustoma selenifolium* Salisb. で *E. exaltatum* の名で Botanical Register (1845) に 13 圖として、原色圖がある。全株灰綠色、對生葉は卵形又は橢圓狀披針形、鏡頭、全縁、長さ 5 cm。萼裂片 5、線狀、綠色、花は一見キキョウのようで、徑約 6 cm であるが、深く 5 裂し、裂片は倒卵狀で頂部細波狀、碧綠色、筒部は短くて白色、花心に濃紫斑がある。雄蕊 5、花糸は直立し長さ 5 mm。雌蕊は長さ約 1 cm、淡綠、柱頭は幅ひろい黃色の 2 片に分れる。なお、つぼみのときにはよれる。開花は光線の不足により、やや閉さる傾向がある。花色には變化あり、また腊葉では白色部も紫色をおびる。